

John Fogerty
"Centerfield"
Warner Bros. [US] ●1-25203
[1985] ◆Geffen [US]
©B001444102

incl. 'Centerfield'

カ野球をテーマにしたアーネスト・セイヤーが88年に発表した有名なボエム『Crazy At The Bat』に登場する、空想上の野球チームの名前だ。そのボエムでは、ケイシーという選手が三振して試合に負けてしまうのだが、この曲の歌詞では、自分がマッドヴィルの試合でベンチを温めていたとき、ケイシーが三振して落ち込んだと歌われる。そして、こう続く。『So say hey, Willie, tell the Cobb and Joe Dimaggio』。まあウィリー、コブとジョー・ディマジオに言ってくれよ。自分を試合に出すように、コーチに伝えてくれというわけだ。ここに出てる『Willie』とは、きつとウィリー・メイスのことだろう。50〜60年代に活躍した超一流選手だ。Cobb はタイ・カッブで、野球殿堂入りした第一号の選手。そしてジョー・ディマジオは一時、マリリン・モンローと結婚していたヤンキースの紳士なス



ストリング・ゼム・アロング 文=ジョージ・カックル

第13回

アメリカ人の心の故郷としての野球

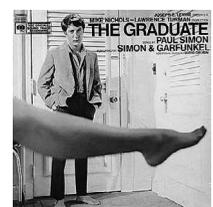
野球といえば、アメリカでは夏に観戦するものだ。のんびりと家族と過ごすピクニックのような時間だ。野球選手は年齢を重ねて太っても、走れなくなっても、試合には出られる。プロのスポーツの中でこれほど太った選手がいるのは、ほかにはないだろう。だからこそ、アメリカの野球選手がアスリートと呼ばれたらこう答える。『俺たちはアスリートではない、ベースボール・プレイヤーだ』。

野球はチーム・プレイだが、選手はそれぞれいつも一人だ。バッティングするときも一人で立つ。外野手も一人でボールを追う。ピッチャーも一人でマウンドに立つ。まるで白い帽子をかぶる、ロン・レンジャーだ。

失敗するときも一人。バッターは三振したら、頭を下げてベンチに戻る。ピッチャーは降ろされたら次のピッチャーにボールを渡し、頭を下げてベンチに戻るが、もう一度復活できるチャンス待たず。英語に『Dust yourself off』という言葉があるが、これは野球からくる言葉だ。自分のユニフォームについた埃を払って、もう一度立ち直ること。それがアメリカ人の心だ。では今回は、野球が登場する曲を紹介しよう。

おそらく今、アメリカで一番有名な野球の曲はジョン・フォガティの『センターフィールド』だろう。85年にリリースされた同名アルバムはチャートの1位に輝き、この曲もシングル・カットされた。『センターフィールド』は、アメリカのどこの野球場でも試合中にかかる。野球を観に行くファンのための曲だ。ちなみに、アルバムのジャケットには、野球のグローブがレイアウトされている。

曲の主人公は最初は試合を観ているが、次第に興奮し始めて、こう叫ぶ。『Put me in coach, I'm ready to play today. Look at me I can be centerfield』。コーチさんよ、俺を試合に出してくれ。プレイの準備はできている、俺はセンターを守れるぞ。このコーラス部分は、曲の中で繰り返される。センターは、文字通りフィールドの中心を守り、守備範囲の広さが要求されるため脚が速く強肩でないと務まらない重要なポジションだ。



original sound track recordings
"The Graduate"
Columbia Masterworks [US]
●OS3180 [1968] ◆ソニー
©MHCP2065
incl. 'Mrs. Robinson'

一つある。サイモン&ガーファングルの『ミセス・ロビンソン』。マイク・ニコルズ監督の映画『卒業 (The Graduate)』のテーマ曲だった。

歌詞にはこうある。『Where have you gone Joe Dimaggio, a nation turns its lonely eyes on you』。ジョー・ディマジオどこに行ってしまったんだ。国中が寂しがっている。この曲がヒットした後、ポール・サイモンがばつたりジョーに会って、この曲の話になったそうだ。ポールはジョーにこう言われた。俺がどこに行つたのかと聞いているけど、俺はどこにも行っていない。ミスター・コーヒーのコマードシヤルも最近やったしね。ポールはこう切り返した。ジョーをアメリカン・ヒーローに誉めているんだと。ヒーローは数少ないからね。でもこの曲は映画『卒業』で、浮気しているロビンソン夫人の曲だ。そこにジョーのこ

とが入っているのも不思議だけどね。

● アメリカのメジャー・リーガーのあだ名がそのままタイトルになった曲もある。ジョー・コツカーの『キャットフィッシュ』だ。本名はジェイムズ・オーガスタス・ハンターで、あだ名がキャットフィッシュ・ハンターだった。ジョー・コツカーの76年のアルバム『ステイングレイ』に収録された、ボブ・ディランの曲(ジャック・レヴィとの共作)。ボブは、もともとは76年の『欲望 (Desire)』に入れようと思っていたのだが、91年の『ブートレグ・シリーズ I-III』によりやく収録された。キャットフィッシュは19歳のときにメジャー・リーグでデビューして、野球殿堂入りも果たした。彼は68年に完全試合を達成、31歳で200勝したスーパースターだ。5回もワールド・シリーズを勝っている。

● いくつか面白い歌詞があるので見てみよう。サビは 'Catfish, Million Dollar Man, no one can throw the baseball like Catfish can'。キャットフィッシュは100万ドルの男。誰も彼みたいにボールを投げることはできない。キャットフィッシュは当時、一番高いギャラをもらっていた選手だ

うに見えた。でも最近、道沿いのバーにろうとしたら、そのピッチャーだった彼に会い、二人でバーに入って飲むと、彼は昔の良かった出来事しか話さなかった。そしてコーラスが繰り返される。'Glory Days, they'll pass you by'。栄光の日々は、あなたを通り過ぎていってしまう、と。

● 次のヴァースは、昔はすぐきれいだっただ女の子の話。次のヴァースは主人公の父の話。20年間、フォードの工場で働いたが、今はもう年寄りが集まるクラブでカウンタ―に座っているだけだ。そして彼はこう言う。'Glory Days, yea goin back, glory days, ain't never had'。栄光の日々はなかったけど、そこに戻りたい。

● 最後のヴァースで、主人公は 'well'。井戸に行つて(井戸はバーのこと)、存分に飲んで楽しむと語る。そのバーで、俺は年をとって栄光の日々を語るような人間にはなりたくないが、きっと俺もつまらぬそんな男になってしまうだろうと嘆く。

● 野球に関わる社会問題を取り上げ、コンセプト・アルバムとして世に送り出したものもある。ライ・クーダーが2005年にリリースした『チャヴェス・ラヴィーン』



Joe Cocker
"Stingray"
A&M [US] ●OSP4574 [1976]
◆A&M [UK] ©394 574-2
.....
incl. 'Catfish'

つたから、野球界で最初の100万ドルの男と呼ばれていた。

● その後の歌詞に 'Used to work on Mr. Finley's farm'。かつてキャットフィッシュはミスター・フィンレイの農場で働いていた、とあるのは、半分、本当の話だ。彼は高校3年生のころに兄と狩りに行き、誤って足をショットガンで撃たれて弾がいくつか足に埋まり、足の指を一本切断した。そんな怪我で歩くのもままならなかったが、彼に惚れ込んだカンザス・シティー・ロイヤルズのオーナーであるチャールズ・O・フィンリーが、彼をインディアナに持っていたファームへ連れて行き、医者をつけてリハビリさせた後、自身のチームに入団させた。あだ名のキャットフィッシュはフィンリーによる命名で、趣味のナマズ釣りに由来する。その何年後、彼はフィンリーともめてチームをやめ、ニューヨーク・ヤ

● ヴォーカルはハワイアンのブラ・パヒスイ。このアルバムはロサンゼルスにあったメキシコ村の近くにある、チャベス・ラビンを歌ったものだ。50年代前半、政治家や建設会社、不動産家たちは、このチャベス・ラビンに住んでいた人々を球場建設のために追い出してしまった。町をブルドーザーでつぶし、当時、ブルックリンを本拠にしていた野球チーム…ドジャーズをLAに呼ぶため、球場を作った。

● 「サード・ベース、ドジャー・スタジアム」という曲は、現在の球場で、車を駐車している男性と席を探しているファンの会話でできている。最初のフレーズはこうだ。'Mister, You're a baseball man, as anyone can plainly see'。あなたは野球が好きなの男だよ。誰だってあなたを見たらかかるよ。主人公は、空に見える月と星の下に、車を止めている。この月と星は、



Ry Cooder
"Chavez Ravine: A Record By Ry Cooder"
Nonesuch/Perro Verde [US]
●7559-79877-2 [2012]
.....
incl. '3rd Base, Dodger Stadium'

● シンキースに移ってしまつた。キャットフィッシュは31歳で引退したが、50歳代にALSを発症し、その1年後には、亡くなってしまった。

● 次のブルース・スプリングスティーンの『グロリー・デイズ』。この曲は彼が84年にリリースした『ボーン・イン・ザ・USA』からの5曲目のシングル・カットだ。この曲に出てくるキャラクターは、通り過ぎた青春時代を人生の一番いい時だったと振り返り、ブルースらしい人間くささを漂わせている。

● 野球についての歌詞はファースト・ヴァースだけだが、アメリカで野球の曲の話になるとこの『グロリー・デイズ』がよく出てくる。高校時代に野球選手だった友達の話だ。曲の主人公のその友人は凄く速い球を投げ、打てない選手がまるで馬鹿のよ



Bruce Springsteen
"Born In The U.S.A."
Columbia [US] ●QC38653
[1984] ◆ソニ― ●MHCP728
.....
incl. 'Glory Days'

● 52年に見たものと同じだ。このヴァースの最後の1行は 'If you want to know where a local boy like me is coming from, 3rd base, Dodger Stadium'。なぜ僕がこんなことを言うのか知りたいなら、ドジャー・スタジアムの三塁を見てくれ。この曲の主人公は、球場ができる前は、いま三塁がある場所に住んでいて、野球をして遊んでいた。

● 次のヴァースでは、おばあちゃんがちょうどいま二塁があるところで、ロッキング・チェアに座っていたよ、と歌われる。次のヴァースでは、初めてキスをした場所を説明している。ブルドーザーが僕の庭を壊していなかったら、彼女と二人の名前が彫ってあった木がまだあったはずなのに。そのときは野球はタダだったよ。そして、昔は自分が住んでいた場所に、今は働きにきている。聴いていると、本当に切なくなる曲だ。この曲では、主人公の相反する内面が表現されている。ひとつは、想い出の土地を失った哀しさ。もうひとつは、有名なドジャー・スタジアムがかつては自分の住処だったことを自慢したいと思う気持ち。アメリカ人にとって、野球はハートビートと同じなんだ。